

創学舎ニュース

No.284

燃えろ

計画はこう立てろ、参考書はこう選べ、英語はこうやれ、数学はこうやれ、等々というものはいくら細かく知っていても、それは要するにルールを敷いたというだけのことであり、またルールの上に汽車をのせたというに過ぎない。どんな非のうちどころがないルールや汽車ができたがあつても、それだけでは汽車は1メートルはおろか、1センチも動かない。

それを動かすには石炭に火をつけることが必要である。いったん石炭に火がつき燃えあがれば、やがて汽車はつなりを立てて走り出す。今までルールや汽車それ自体のために費やしていた努力が、この時、この石炭が燃え上がる時、それによってことごとく生きてくるのである。もちろん石炭が燃えなくとも、他からの力で押すか引くかすれば、少しは動くかもしれない。しかし、それがいかに困難であり、苦しいものか僕は知っている。そして驚くべき力の消耗を伴うものであることも知っている。

ところで実際に受験生に感じていることは、まったく燃えないのか、またはほんの少ししか燃えない汽車を、無理に、あるいは他の力に押されたり引かれたりしながら、時にはいやいやながら動かしている者が大半であるということだ。

それも仕方ないことのように思われる。なぜなら17・18歳で人生の意義をつかむものには時

代が、環境が悪すぎるからであり、人間が人間らしく生きることを失いつつある日本であるから。そろばんずくの功名心や虚栄心、競争心などで燃える火が、もつと貧弱な火でしかないことは、きみたち自身が、誰よりもよく知っている。きみらは、いかに頑張ろうとしてみても、心の底から力が湧き出てこないのに、実はイライラし、ジリジリして悩んでいる。やらなければならぬとは十分にも十二分にも知っていないが、やれないのだ。

それは、君らの中の魂の中に赤々と燃える火がないからである。質の悪い石炭の力で動くとするからである。では魂のなかに本当の火をつけるためにはどうすればよいか。

これは難しい。生きて、苦しみあがいて身につけるかもしれない。あるいは、若い君たちなら、希望に全身を投げ込む覚悟から生まれ変わるかもしれない。



今日は、参考までに僕の人生観を書いておきます。

「人生は、他人に自分の優秀さを見せびらかすためにあるのではない。他人に勝つ喜びを味わうためにあるのではない。前途に立ちほだかる様々な困難を乗り越え、きりひらき、そうすることによって自己を無限に高め、天地の化育に参し、新しい時代がそこまで来ていると信じ、模索し、限りなき挑戦をすることこそ本当の人生の意義がある。人生は絶えざる自己との戦いである。その戦いを、戦い取ろつと決意するとき、魂の火が本当に燃えるのである。燃えないところに真の生活はなく、真の勝利はない。」

全ての勝利は、他人に勝つことではなく、自分に勝つところに存在する。一度と来ない一生だ、全身全霊でやるぞと燃え立たなければ……。」(柳)

夏に向けて

蒸し暑い日が続いていますが、日々の勉強のはかどり具合はいかがでしょう。いよいよ長い夏休みです。この休みの過ごし方が2学期以降の学力に大きく影響することは言うまでもありません。しっかりと計画を立てて確実に実践して欲しいものです。

さて、高3生諸君へ。夏休みは最低12時間の勉強をこなさい。12時間という時間は十分実行可能な時間数です。ただし、12時間集中して勉強するという意味であつて12時間本を眺めるということではありません。残念ながら私の目から見ると現在のきみ達の勉強は本を眺めているとしか見えません。という、必死で勉強するといふ悲愴感を漂わせて勉強するというイメージを想定する人がいるかもしれません。しかし、私の言っているのは気迫であつて悲愴感とは全く違います。悲愴感というのは失敗したらどうしようといふ不安感から発生するものであり、気迫は成功を信じて全身全霊を打ちこむことから発生するものです。一生懸命集中して勉強するならば気迫を感じる勉強をしてほしいものです。

具体的な内容に触れるならば、今までやってきたものの復習と新たに始めるものとのバランスが大切です。どちらかが欠けても効果は薄い

ものになってしまいます。また、復習は短時間に一気にやり、新たに始めるものはじっくりと取り組むことも肝要です。あとは、教科の時間配分をよく考えて下さい。最後に、勉強は頭だけであるのではなく、精神と肉体の両方を用いるものであることを繰り返し言っておきましょう。

次に、中3生へ。残念なことですが、現在の受験体制では、9月から11月にかけて行われる学校の業者模試の結果で私立の推薦が決定されてしまいます。しかも、私立の推薦枠が拡大され、推薦なしで受験となると一部の私立を除きかなり厳しいのが現実です。したがって、この夏休みの終りには、模試で結果を出せることが必要条件となります、必然的にこの夏休みに勉強することが必須条件です。高3ほどとは言いませんが、1日8時間程度の勉強をしてもらわなければなりません。復習と予習に全力投球をして下さい。

受験生以外の人へ。1学期のテスト等で、一度やっただけのものがいかに身につけていないかは痛感されたはず。せっかくの夏休みなので、この機会に復習に重点を置き、今までやってきたことを確実に身につけて欲しいと思います。検討を祈ります。(村上)

脳が溶ける(7)

勉強は、大半の人にとって面白くない。テレビや音楽やゲーム、コミック、スポーツ……。こつたものもつ面白さは、勉強にはない。しかし、集中して取り組んでしっかりとした充

実感 達成感を味わっている人もいる。そしてその充実感・達成感というのは、きみ達がよく知っているはずの面白さとは、実は全く別の面白さなのである。大声をあげる訳でも笑う訳でもなく、外からは全くわからない、個人的な快感でもいっぺきもので、なかなか共有されにくい。しかし、これを十分に味わった人にとっては、科目がかわったときも、あるいは、勉強とはまた別の文書作成作業や資料作りの場合にも、同様に個人的な快感を味わえる可能性が高い。

しかも、ていねいに、勉強するときに能率と効果を考え、工夫を凝らした人は、文書作成の仕事でも、同じようにしてくれる可能性が高い。従って企業が、開発や研究でも事務職でも、こういう可能性の高い人を採用するのは当然である。人がその仕事の定義や価値を、心が揺さぶられる程の感動をもって理解することは、ますます珍しい。仮に、意義や価値を分かったとしても、通常はそこに至るまでかなりの時間を要する。だから、分かる前でも、仕事として一定の秩序を持って(つまり、仕上げる快感を味わって)働いてくれる人が望ましいのである。

前号で、勉強によって、仕事をする上での基礎中の基礎「根本能力が養われる」と書いたが、その根本能力が、ここに述べたことになる。と、いって、小学生や中学生に、いや高校生にも、こいつ話をしても「フーン」でおわりだろう。しかし、身につけてもらわないといけない。そこで、親や教師の出番となる。きちんとやる、一生懸命やる、工夫する。そして達成感と充実感を味わう。こつしたことを一人でも多くの生徒に経験してもらうために、親や教師は、いや他の大人達も手を貸さないといけないのである。「こんなの知らなくてもいい」「やったって何の役にもたたない」と、学習する事柄の一つ一つに抵抗感をもつ生徒は多い。それは、ある意味で正しいのだろう。しかし、子守りや家畜の世話など家の手伝いから解放された子供達が、物事にきちんと取り組む機会というのは、極端に少なくなっている。

峠を越える

(小林健)

大分県別府市といえば、地獄を含む別府八湯を有する日本屈指の温泉地として知られているが、その地形もダイナミックで、「急峻」の一言に尽きる。おそらく車で来た人は、高台にある高速のインターから別府湾に面した市街地まで、一気に落ちていくような錯覚にとらわれるにちがいない。



5月のある日、私は愛車(自転車です)と共にその別府の市街地にいた。これから急勾配の別府の街を由布岳のふもとまで標高500m近くまでのぼり、由布院を抜け、熊本との県境の壁湯温泉まで走る。約60キロの距離ながら、途中に二つの峠を越えなくてはならない。

ペダルを漕ぎ出す。私の故郷の長崎も坂の街だが、別府の坂も相応きつい。最初の5キロで平坦な場所は皆無だ。由布院へ抜ける峠に向かう。人家もなくなった。道路が大きく蛇行して

いることから、どのくらい勾配がきついかという事は容易に想像がついた(日光のいろは坂を思い起こしてください)。初めて通る道にも関わらず観光マップしか用意していなかったことと、標識が少ないために、自転車に取り付けた距離計を基に現在地を想像するが、結局よくわからない。出発して一時間が過ぎ、延々と続く坂を見ながら、想像以上のきつさと、まるで先の見当がつかないために、早くも気持ちが折れそうになってくる。道路脇の木陰で、休憩しながら、ぼんやりと考える。

もし、今、来た道を引き返したならどんなに楽だろう。そうすれば、ずっと下りだ。しかし、それは、何度も汲んでやっと桶に溜めた水を引っくり返して空にするようなものだ。そんなことはしたくない……。

そして、またペダルを漕ぎ出した。今度は作戦を変えた。あえて、先は見ないようにした。ペダルを漕ぐ自分の影と過ぎていく地面だけを見つめ続けた。

すると、不思議なことに気持ちが少し楽になったのだ。坂の勾配も、ペダルを踏む動きも変わっていないのに。ひたすら漕いだあと、ふと振り返ってみる。思いのほか結構進んでいる。先だけを見て全然進まない、といらいらしていたさっきまでの気持ちとはずいぶん違う。漕げば漕ぐほど、とにかく前進している。そんな当たり前のことがとても嬉しいのだ。

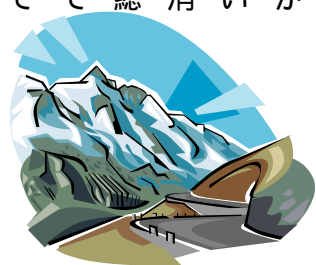
その内に、ペダルが軽くなってきた。勾配が緩くなっているのがはっきりわかる。そして、ついに、初めてフラットな場所へ出た。城島高原という場所だ。さっきまでの鬱憤を晴らすか

のように足がよく回る。時速は30キロを超えた。周りには私しかないのです、自然と(？)雄たけびをあげた。「今日のことを創学舎ニュースに書くぞー!」

城島高原を過ぎると、由布岳の麓へ出た。火山弾が巨大な岩石として四方に点在しながらも、草萌えるその風景は時を忘れて見惚れてしまうほどだ。そして、時速50キロを越すほどの下り坂の途中に、由布院が一望できる狭霧台という絶景ポイントもあった。その後、もつひつの峠もクリアし、6時間かけて目的地に着いた。

「自転車の峠越えは、体力・知力・判断力の勝負です。すべてが自己責任の世界です。それだけに自分の立てた計画通り走り通せた時の達成感は格別なものがあります。(自転車誌のコラムから)」

「峠を越える(越す)」ことは、本当にハードな作業だ。最初からあきらめることもできる。だが、目の前の道を一步一步踏みしめれば越えられることも事実だ。峠を好む自転車乗りは多いぞうだ。上りの辛さの分だけ、下りの爽快感が「褒美として待っているからである。上りで消費したエネルギーの総体が、まるで塊となって自転車を押しつけてくれるようにもなる。



そして、この「峠」や「道」はあらゆる物事の比喩でもある。峠に挑もつとして人々。峠で格闘している人。また峠を見つけれない君と一緒に乗り越えようぜ!

(関)